

明治期における観光地「日光」の発展

筒井 菜緒

はじめに

課題の設定と研究方法

現在でも観光地として名を馳せる栃木県日光^{〔1〕}は、中近世より信仰や湯治のために多くの人が訪れる地であった。古代、勝道上人が開山して以降、修験道の山岳信仰が発達し、近世期には、遺命により徳川家康が祀られた日光東照宮が建てられた。大名参詣のほか庶民参詣も行われるようになり、繁栄を誇ったが、江戸時代後期から明治時代初期にかけて急激な衰退を見せる。背景には、將軍家の寄進地として幕府との結びつきが強固であったことが挙げられる。幕府は寺社・堂塔の造営、修復には資金を充て、領民には夫役の優遇をすることで日光山領を維持するための相互関係を築いていた。全国的にも徳川家の象徴として認知されていたことから、尊皇攘夷運動や戊辰戦争では徳川家の権威利用をはかる進軍が見られ、日光は騒動の中心地となった。結果として、幕府の庇護を失った明治初期の日光山は経済基盤を失い、貧窮を極めた。それにも関わらず、その後明治一〇年代以降には外国人を中心とした避暑地としての発展を遂げ、国内を代表して海外にまで認められる地になっていた。日光は、なぜ再び繁栄することができたのだろうか。

日光には、近代観光地としての主な特徴が四点ある。第一に鉄道開通によって集客に成功したこと。第二に外国人避暑地としての観光地が形成されたこと。第三に元来の温泉地が含まれていたこと。第四に宗教的聖地として位置づけられていたことである。これらの特徴は、先行研究においてもそれぞれ個別に検討されてきた。老川慶喜は、鉄道の開業とその営業戦略によって各地に誘客が促進され、観光地の発展に大きな影響を与えたことを明らかにしている。⁽²⁾次に、小林収によると、長野県軽井沢では外国人による開拓の結果別荘地帯が形成され、観光地としての発展の契機となった。⁽³⁾続いて、関戸明子は、草津温泉においてはメデイアイメージや住民による町づくりの中で滞在の目的が療養から避暑へと変化していったことを指摘している。⁽⁴⁾さらに、ジョン・ブリン、谷口裕信は、伊勢神宮において地元密着型の都市整備計画が進んだことで「聖地」イメージが創出されたことで、社寺を中心とした近代化が図られたことを明らかにしている。⁽⁵⁾このような近代観光地の特徴は日光でも同様に認められるものであり、この複合的性格が日光の発展を支えたと考えられよう。

これらの特徴は地域の「外」の力と「内」の力の二つに分けることができる。まず、「外」からの観光客なくして観光地は成立しない。観光客がその土地に何を求めているのが重要であり、その背景には地域に対するイメージの影響力がある。この点については、福田和美が避暑地の成立過程を多面的に描いている。まず、欧米人は日本人の山岳信仰のような宗教的文脈ではなく、自然風景に含まれた保養地、學術調査の対象として興味を抱くと考察している。⁽⁶⁾ここで日光として想定されているのは中禅寺湖畔の奥日光であるが、実際の日光は奥日光だけではない広い地域を指すため、これは部分的な解釈に限定されているといえる。また、福田は皇室や明治政府との結びつきを挙げ、日光の発展は時代の支配者と密接な関係を築いてこそ見られるもので、日光自身の力だけで発展はできなかったと指摘している。⁽⁷⁾たしかに、中央権力との関係性が経済発展に寄与した一面はある。しかし、日光では明治初期より近世来の名所や建築物を生かした産業活動が住民によって自主的に始められていたため、発展の端緒はむしろ町の内部にあったと考えられる。さらに、田代江太郎と伊藤弘によるランドスケープ研究は、交通機関の発達の面から東照宮の門前町・宿場町である東町の景観体験が二社一寺

への期待感を抱かせていたことを明らかにした。⁸⁾つまり、観光客に対して東町は二社一寺と一体となった日光イメージを与えていた。この空間的特性は日光を捉える上で重要だが、日光全体の観光体験の変化には交通機関の発達にとどまらない複雑性があったと考えられる。日光観光への「外」からの視点は多様であり、そのニーズを満たす価値提供を通じて日光は自主的な発展を遂げていた。このことから、日光の発展における「内」なる力の重要性がうかがえる。

そのため、日光「内」部において住民達の視点から発展の経緯を明らかにする必要がある。近世史研究では、佐藤権司が神領農民の暮らしを多面的に検討している。神領農民が幕府から格別の扱いを受けることで「神領意識」という誇りを持ち、自身の特権を正当化させていたことを指摘している。⁹⁾しかし、幕府衰退と共に神領はなくなり、東照宮関係者の暮らしが一变することからも、近代における東照宮や徳川家への意識については検討する必要がある。近代史研究では、木村遼之が古社寺保存運動の中でも有志団体の保晃会を例に地域住民との関わりを取りあげている。保晃会の位置づけについて、明治三〇年前後に有志による批判に遭っていることから、地域の実情に適さなかったと指摘している。¹⁰⁾しかし、批判に関する事実は史料上明らかにされておらず、町民の支援によって活動が継続されてきた経緯を踏まえると、地域との関係性には疑問が残る。また、他の観光地を対象とする研究においても、住民との関わりは近代観光地の形成に大きな意味を持っていることが明らかにされている。

そこで、本稿では日光町の住民達が近世後期以降の荒廃をどのように受けとめ、発展へと導いたのか、中央権力や外国人との関わりのなかでどのような価値を提供していたのか、明らかにしていく。検討にあたっては、主に栃木県地方新聞の『下野新聞』（明治一七年まで『栃木新聞』）を用いて、住民視点から明治期の日光の特性を捉えていきたい。ただし、『下野新聞』は明治三〇年代以降、戦争や政治、外国の状況を伝える記事が大半を占め、日光を含め各地方に関する記事が減少していく傾向が見られた。その上まとまった欠版も多いことから、中心となる分析は、正確な状況がわかる明治三九年までとする。

以上の課題を踏まえて、第一章では「外」から見た近代日光の変遷について考察する。観光案内や絵図などの出版物を用いて、観光地日光のイメージがどのように創出されていたのか明らかにする。徳川家との結びつきが日光評価に与えた影響と変化についても併せて分析する。第二章では、日光を「内」視点から捉えるため、日光町の町民が地元に対してどのような想いを抱いていたのか、その行動から分析していく。明治初期から町民による社寺保存運動が盛んに行われていたことから、町民は社寺に対して価値を見出していたと思われる。ここでは社寺保存運動を中心に、全国的な政治運動との対比の中で町民の価値観をうかがう。第三章では、先行研究でも明らかにされている避暑地としての発展という日光のターニングポイントを取り上げ、「外」からの登見者の視点と「内」の日光町の価値観が重なることで町がどのような変化を遂げたのか明らかにする。

「日光」とは何か

先述の通り、観光業を支える要素として重要なのが、「外」から見た日光イメージである。「日光」の範囲は明治期には行政単位として確定されていく。江戸時代には幕府の直轄支配下にあった日光町は、周辺の各町村と共に日光領の中に内包されていた。各町村の統治はそれぞれ名主により行われており、明治初期に至るまでこの分立は続いていた。ただし、明治五年以降周辺町村を含めた区画整備が進み、明治一一年に上都賀郡に所属した後、明治二一年の町村制によって合併、一部今市町への分離により「大日光町」が組織された。¹¹つまり、日光町は近世以降変わらない社寺近辺の中心的枠組を保つ一方で、周辺地域の編入や独立を繰り返し返し、日光領に比べると小規模ではあるが、新たに拡大した日光町としての単位を得た。ここで指している「日光」は多くが新聞上や政治運動での名義として使用されており、生活利益の区切りとしての意味を持つことで、内側の結束を高める役割がある。

しかしこうした区域の明確化にもかかわらず、「外」から見た観光上の日光の範囲は、その区域にとらわれないもの

だった。日光には元来、日光山全体を含めた広範で曖昧なイメージがあるが、明治期においても観光上の「日光」イメージは伸縮自在であった。例えば、メアリー・フレイザーは明治二三年の旅行記において次のように述べている。

ここ（鉢石の村）がこの地方の中心なのです。このように書きますのは、私たち外国人は、この鉢石だけを指して日光と呼んでいます。日光という地名はもともと、東京の北八〇マイルほどにひろがる高原全体を言うからです。⁽¹²⁾

多くの外国人は社寺門前町である鉢石町を日光と呼んでいたが、フレイザーのように日光山全体を指した定義の認識もあることが分かる。観光において人々の印象に残るのは実際の行政区分としての地名ではなく、その時体験した景色全体であると考えられる。

それでは、明治期を通じて観光上の日光イメージはどのような変容を遂げていったのだろうか。

第一章 外部評価による日光イメージの形成

第一節 日光イメージの形成と普及

(一) 観光案内に見える日光

日光イメージの波及と形成を支えていたものが観光案内である。日光湯元は近世より湯治場として知られた地であったが、明治一〇年前後より全国的に温泉振興が盛んになったこと⁽¹³⁾もあり、手引きとなる温泉記が多数刊行されている。また、旅行者の増加に伴い、その他名所各地の案内記や絵図の刊行も盛んになる。これらの著者・編纂者には日光町民が多く見られるが、他地域の著者による案内と比較しても大きな差異が無い。そのため、これらの観光案内が一般的に一定の

日光イメージを創出していたと考えられる。観光案内には、温泉記、案内記、案内絵図の三つがあり、それぞれ視点やイメージに固有の特徴がある。そのため、ここではこの三種類の観光案内を合わせて検討することで、著者であった日光町民やその関係者が示そうとしていた日光像について考察していく。

まず、寛政三（一七九二）年と明治三六年に同名で刊行されている『日光山中禅寺温泉記』¹⁴について両者を比較検討する。各温泉の概要や入浴方法を記した「温泉記序」は文面にほとんど変化がなかったが、明治三六年版には湯の分析表と「晃山温泉開基及神徳功記」、「湯本近傍案内」¹⁵が加わっている。「晃山温泉開基及神徳功記」では、湯本は「大僧正」が晃山において「山石草木河川水風氣に至る迄人生諸病に奇薬あるを発見」した泉であり、「温泉風氣共に諸病に奇功有る」と説明している。「湯本近傍案内」でも周辺の山々の自然の美しさに言及していることから、明治三六年の温泉記では温泉と日光山全体の自然名所を含めて健康の御利益を表現していると考えられる。

続いて、日光山名所各地の案内記について見ていく。明治一〇年代から三〇年代後半に至るまで、それぞれ名所を網羅的に解説していく形が共通して見られたが、記述内容には時代による変化がある。明治一〇年代の案内記では東照宮をはじめとする社寺や周辺堂塔に説明が割かれていたが、明治三〇年代になると、日光市街地における土産店や鉄道の情報が中心となっている。後述する絵図の説明で分かるように、日光町民や関係者にとっては、こうしたサービス業を商機にかなげるべく、社寺周辺から市街地へと観光客の視点を広げる目的があったものと思われる。

日光山全体の自然を強調する温泉記と、社寺周辺から視点を拡大させる案内記の双方の特徴が見られたのが、案内絵図である。多くの絵図が東照宮と大猶院殿の二社を中心として日光山全体を見渡す構図になっているが、時代と共に周辺名所への視点の拡大が見られる。多数の絵図で画工および編輯、出版人を務めている日光鉢石町の鬼平金四郎の作品の中でも、その変化がうかがえる。明治一〇年代から二〇年代にかけては「日光山両社」を題として描いていることが多い。絵図に添えられた説明文においても、明治一四年刊行『日光山両社真景』では、開山当時の歴史と徳川家の御霊屋を紹介し

ている。一方、明治二〇年代以降になると、社寺に加えて周辺の自然名所を強調して描かれた絵図が増える。明治二二年の『日光両社名所全図』は、明治一八年『日光山両社真景』とほぼ同じ東照宮と大猷院殿の絵の周辺を、華嚴の瀧や裏見の瀧などの瀧の名所や中禅寺湖などの絵が取り囲む構図になっている。【絵図1・2参照】また、その他の作者の絵図にも同じ傾向が見られる。日光町中澤逸平画作の明治三三年『日光市街近傍圖』では、「世界ノ美術ハ日光ノ宮殿ナリ世界ノ公園モ亦日光ノ地域ナリ」と説明し、社殿を含めた景観全体の美しさについて語っている。なぜ自然を意識した描写が明治二〇年代以降増えたのだろうか。背景には、当時増加していた外国人登見者が自然の静閑さを求めていたことが挙げられる。その具体的な目的については第三章で後述するが、案内絵図の作者がこうした需要に応じて内容を変えていった可能性は高いといえよう。

このように、時と共に観光案内での表現を通じて観光地としての日光が示す対象や地域の範囲は広がっていたことがわかる。しかし、観光案内は既に日光に興味を持っていた一部の人にしか印象を与えない。次項では、より幅広い人にイメージをもたらした教育現場での発信について検討する。

(二) 教育現場を通しての発信

全国的に日光に対するイメージが定着していった背景として、小学校をはじめとする教材に日光がとりあげられたことがあげられる。これにより、義務教育の段階から全国的かつ恒常的に日光を知る人々が増え続けていったと考えられる。ここでは『明治以降教科書総合目録』に基づき、①明治初年教科書¹⁶⁾、②明治検定教科書、③国定教科書の三つの時期¹⁷⁾において各科目でどのような情報が国民に届いていたのか分析する。主に小学向け教科書を対象とするが、明治一九年小学校令によって尋常高等小学校が設立されたことで、明治検定教科書以降には高等小学校向けの教科書も含む。これらの教科書は表現の難易度が変化するのみで、内容面で小学向け教科書と大きな差異はないため、同様に扱うことにする。日光に

ついでに記述が見られたのは読書及作文（国語）、唱歌、地理、歴史の四科目である。どの科目や時代においても天然と人工の美を併せ持つ場所という趣旨の記述が見られ、これが日光のイメージの根底を形作っていたと考えられる。多くの教科書内では、陽明門や瀧の挿絵が頻繁に掲載されたことで生徒達がその光景を思い浮かべられる状態となり、さらに知識の浸透につながったと思われる。教師用指導書の教授上の注意においても、写真を使うことで荘厳さが分かるよう教えるようにとの記述が見られた¹⁸。一方、徳川の歴史についての言及は歴史科目以外ではわずかで、瀧や湖、温泉などの地理的要素により重点がおかれる傾向があった。これは、明治二〇年代以降、鉄道の開通や外国人避暑客の増加に伴い、日本を代表する遊覧の地としての捉え方が強くなっていることが関係していると思われる。徳川家の説明については、歴史の教科書や授業上の指導書の中でも時代とともに変化が見られた。この点は徳川家評価の変遷にも関わるため、次節で合わせて言及する。

教科書の他に、修学旅行で日光を訪れる学生が増えていたことも、イメージが体験とともにさらに定着する一因となったと考えられる。明治三二年一〇月二八日の『下野新聞』には、「毎日乃至隔日等必ず小学、中学、各県師範学校又は高等学校女学校其他各種学校生徒の登山するを見る」との記述がある。迎え入れる日光内部では土産ものの需要が増えて観光産業が成立するようになり、地名をつけた商品を販売することでさらに観光地イメージを拡大させていたと考えられる¹⁹。

以上のように、観光案内を通じて、社寺中心だった日光の名所は中禅寺湖や瀧などの自然名所を含む日光山全体へと拡大していった。また、教育現場においても地理的要素に代表される視覚的な美しさが重視され、修学旅行を含め、日光を訪れる契機を作り出していったといえる。それゆえ、これらの語りによって生み出された典型的な日光イメージは時代を通して拡大、定着していったと考えられる。こうした外部のイメージによって日光の観光業はさらに発展を見せた。一方で、日光は近世以来徳川家との結びつきも意識されてきた地である。この結びつきが日光の発展の足かせとなることはなかつ

たのか、次節で検討していく。

第二節 徳川家の歴史的評価

本節では、観光案内や新聞、教科書などの出版物を中心に、旧幕府および徳川家の歴史的位置づけや評価について、日光との結びつきを含めて時代による変化を追っていく。

まず明治一〇年代の観光案内においては、間接的に幕府の歴史を否定し、自分達日光の歩みや明治政府を肯定しようとする動きがあった。なかでも「沿革誌」などの項目で幕末の日光の衰退を語るものが多く見られた。明治一四年刊行の『下野国日光山湯本温泉繁盛記』では、戊辰の乱以降の数年間、温泉が「衰微中の衰微」であったことを明かし、再興へと努力した温泉守や、繁栄の契機を作り出した「文明政府」を称えている。⁽²⁰⁾ 明治一五年刊行の『日光山探勝略記』では、幕末の荒廢によってなくなった社寺についても説明している。⁽²¹⁾ 前時代を語ることによって、復興した現在の日光の姿に目を向けさせる目的があったと思われる。さらに、徳川の政策に対して直接的に否定する表現も見られた。県内地元紙である『下野新聞』の論説でも、明治一七年三月一日には日本の貿易や學術技芸の遅れの原因を江戸時代の禁教に見出し「徳川政府ノ大失策ト云ハサルヘカラス」と批判している。⁽²²⁾

明治時代半ばには、依然として批判する論調は見られるものの、江戸時代のことを過去のことと捉えて批判したり、捉え直したりする風潮が新たに見られるようになる。明治一四年六月八日の『栃木新聞』では、日光東照宮の祭典における旧式の儀式に「時代外れ」であるとする一方で、「旧政府の行列は斯の如くのものなりしかと今日の人心を大に攪起せし」と肯定的な評価も与えている。八月一九日には、酒癖の悪い元日光輪王寺家の僧が幕政時代の考えから抜け出せずにいる姿を「幕政狂人」と揶揄する記事も見られた。⁽²³⁾ これらの記述から、幕府や徳川家への否定的評価の方向性は、彼らの実績を否定することから、前時代との比較の中で当時の社会状況を説明することへと変化していることが分かる。

加えて重要なのが、美術への注目である。同年代の小学校の教科書においては、徳川家に対する評価の背景に、日光東照宮に対する当時の美術的評価が見られた。明治二四年刊行の歴史の教科書『小学歴史階梯』⁽²⁴⁾では、「家光、家康の日光廟を造営し天下土木の巧妙を極む。諸侯之かために亦疲弊す」との否定的な評価が見られた。だが、土木の巧妙を極められるだけの力があつたことは認められているといえる。また、明治三五年の国語読本の指導書には、以下のような教授上の注意が記されている。

歴史等にて学べる家康・家光の功業を挙げしめ、かつ、徳川三代將軍の時代は、幕府のもっとも盛なる時代なりしことを説明し、かつ、日光は、この時代に、將軍が造営せしものなれば、規模宏大壯麗なるも、もとよりその所なることを知らしむべし。⁽²⁵⁾

日光が「規模宏大壯麗」であるのは、幕府が繁栄していた家光の時代に造営されたものであるためとして、当時の幕府の財力を伝えるよう書かれている。東照宮の美を造ることができた江戸幕府・徳川家の力を肯定していると言える。

日光以外の地においても、徳川の歴史は明治時代をつくりあげる基礎として肯定的な評価が与えられた。明治二二年、徳川家康が江戸入城してから三百年を記念して上野公園および日光東照宮にて東京開市三百年祭が開かれた。ここで東京府知事や委員長を務めていた榎本武揚は祝辞として、「本府ノ基ヲ開ケル徳川家康公」に対して、当時の東京の繁栄を感じ謝している。⁽²⁶⁾

このように、旧幕府および徳川家は明治時代の前身として位置づけられ、その時々には否定的文脈と肯定的文脈が見られた。この文脈は説明したいものとの相対的比較の中で位置づけを変化させるため、旧幕府や徳川家自身が否定されている訳ではないことも多々あつた。ここから、日光における徳川家の位置づけは、近世までの徳川家の象徴としての立場か

ら、その美を形成した一要素として肯定的に捉えられるようになっていったと考えられる。

ここまで日光に対する外部評価について見てきた。日光は、観光案内によって自然と社寺の二つの核を持ちつつ、その観光イメージの範囲を拡大させてきた。このイメージは、教科書に掲載されたことで幅広く通時的に伝わるようなシステムが形成されたことでさらなる定着に繋がった。それまで徳川家と結びついて抱かれていた否定的な印象は時代とともに変化し、東照宮などの評価と共に肯定的な印象になった。こうして、日光は観光地として前向きに再出発を切れるようになった。実際日光町の人々は近世以来の徳川の歴史やその象徴でもあった社寺をどのように捉えていたのだろうか。次章では社寺を中心とした町民達の意識を明らかにしていく。

第二章 社寺保存運動に見える日光町民の意識

第一節 保晃会の設立

日光町では町民による社寺保存運動が盛んに行われており、社寺の存在が町民の地域観と密接な関係をもっていたことが考えられる。そこで、本章では社寺保存運動を町民の社寺への意識に注目して検討することにより、日光内部における「日光」評価を考察する。

まず、社寺保存運動に至る経緯について説明する。幕府による修繕が行われなくなったことで、社寺の破損は進行しつつあった。慶應四（一八六八）年、太政官は神仏分離令⁽²⁷⁾を出し、神社から仏教色を排除しよう命じた。しかし、当時日光は戊辰戦争の渦中であつたこと、また日光山二荒山神社・満願寺が千年以上も神仏習合の地として栄え、東照宮も独立した神社でなかつたことから、日光に実際に指令が達せられたのは明治四年と、他地域より遅れがあつた。⁽²⁸⁾さらに、当時の満願寺は火災や俸禄没収で貧窮を極めており、堂塔を移遷する資金のために三仏堂を売却する計画が立てられた。この

計画は、日光町民をはじめ近隣の住民の世論を喚起した。各町で寄合を開き連判状をまとめ、町民総代落合源七、戸長安西応治、妙覚院巴快寛等が県庁や各関係省庁を訪ねて現状維持の歎願を行っている。住民達は当該計画が実施されれば「土地ノ衰退を招」くと主張したのに対して、内務省は「人民ヨリ敢テ苦情哀訴スヘキ義ニ無之」という認識にとどまった。ただ、内務卿大久保利通が現地を訪れて調べたところ、三仏堂は「移転候共莊観ヲ減シ候義ニモ無之」として据置は認められなかったが、その破却は免れた。²⁹⁾ 明治九年六月、東北御巡幸の際に日光を訪れた明治天皇は、徳川廟や神祠仏寺の荒廢を遺憾に思われ、「三仏堂遷移ノ義不失旧觀様」との聖旨と手許金三千円を下賜している。³⁰⁾

この時、三仏堂を守ろうと奔走する町民達の活動を見た当時実業家の安生順四郎³¹⁾は、

傍觀するに忍ひずして明治八年九月東京に出て先づ徳川遺臣及官辺のものに謀議せしも、国政未だ更始中に係ると徳川家祖廟を以て目認し美術を以て論するの日にあらざれば、彼是嫌忌せらるゝ等の情実あるを免れざりし。³²⁾

と後に記録に残している。日光の保存についてはのちに「徳川家祖廟」を美術的価値の点より保存することとなるが、当時はあくまで徳川家の遺産への「嫌忌」を免れ難かつたという。そのため、安生をはじめとする有志は明治一二年八月、寄付金の利子によって社寺の修営費用を集めることを目的とした保見会を設立する。同年一月に内務卿に宛てて設立認可を求める請願書を提出している。冒頭部分を抜粋すると以下の通りである。

我共承り候ニ、偉蹟ヲ殊世ニ存シ国光ヲ遐方ニ伝フル者ハ、国土義民ノ景慕スル所古今ノ通義万国ノ公論タリト。抑当国日光山ハ山水清秀東照宮ニ荒神社等アリ。其社宇宏麗無双世ニ鳴ル既ニ久シク、且東京ヲ距ル甚タ遠カラス。尤避暑ニ便ナリ故ニ近來外客來航スル者モ亦競フテ此勝域ヲ踏ミ、以テ郷国ニ齋ノ談柄トス。実ニ皇国ノ美觀ニシテ海

外ニ誇輝スヘク、所謂殊世ニ存スベキノ偉蹟遺方ニ伝フベキノ国光ト奉存候。乍然既往顧ミ将来ヲ慮リ候ニ、斯ノ如キ勝地ト雖トモ社宇ノ多キ土地ノ狭カラサル一旦保存忽諸ニ渉ル破損多方ニ生シ、修営漸ク容易ナラサルノミナラス廢壞座シテ俟ツベク、即チ偉跡ヲ微ニシ国光ヲ減スル。實ニ他邦ニ愧ツベキ処思フテ此ニ至レハ、熱汗背ニ流ル、ヲ覺エヌ。於是今回同志相会シ、乃チ保晃会ト称シ泛ク有志ノ釀金ヲ以テ基本トシ公明確正ノ約則ヲ定メ、永遠保存ノ方法相設度奉存候。⁽³³⁾

日光山は自然に恵まれ、東照宮・二荒神社などはその社殿「宏麗無双」で知られ、東京より避暑に訪れる多くの外国人たちに、「皇国ノ美観」を知らしめ、「海外ニ誇輝」すべきものである。彼ら請願人たちは日光山を日本を代表する「国光」と位置づけるとともに、「廢壞」を待つばかりの社殿に相應の修繕を加え、「国光」を保つことを求めた。保存運動への承認を取り付けるため、彼らが日光山への外国人客の存在を梃子に、日光山のイメージを幕府権力の象徴から日本の象徴へと転換させようとしたことがうかがえる。一方で、明治一三年第二回保晃会総会で県内の会員達を前にして、安生は保晃会創立の大意を以下のように語っている。

日光山ノ保存セサル可ラサル所以ヲ云ハ、彼ノ如キ宏壮ナル美観ハ実ニ海外ノ無キ所ニシテ、今日之ヲ破壞ニ附セハ復タ再タヒ之ヲ作り得ヘキニアラス。況ンヤ徳川氏ノ恩澤タル三百年來天下之ヲ蒙ラサル者ナク、殊ニ我下野ノ如キハ其羈府ニ近接シ、加フルニ、其祖廟ノ在ル處ヲ以テ一般ノ人民鴻益ヲ冥々ノ中ニ受クル亦甚タ多シトス。然ラハ則チ若シ晃山ノ觀ヲシテ舊時ノ美麗ヲ失シ破壞見ルヘカラサルニ至ラシメハ、獨リ皇國ノ面目ニ關スルノミナラス、却テ我下野人民ノ不忠ヲ表スルニ至ルヘキノミ。⁽³⁴⁾

日光山が破壊されれば「皇国ノ面目」に関わると述べており、日光は国を代表する地であるという考え方は、前出の請願書と共通している。しかし、「徳川氏ノ恩澤」や「鴻益」を受けてきた身として、旧観の破壊が「下野人民ノ不忠」に値するとの語りは、請願書にはなかったものだ。政府が未だ徳川家の事蹟を否認していたのに対し、当時の下野国民には徳川家に対する報恩の精神が伏在していた。ゆえに、発起人達は保晃会設立を主張する上でこの二つの目的意識——世界の中の日本・日光という「国光」認識と、徳川氏三百年の歴史を継ぐ報恩とを使い分け、両輪としていたと考えられる。この立ち回りが功を奏したためか、会員は県内外で拡大を見せた。のちに日光町と隣接する今市町に吸収される長畑村では会員率が八割を超えるなど、多くの人々が保晃会の活動に意義を感じていたことがわかる。⁽³⁵⁾

もともと、旧観の保存を理念に掲げていた保晃会だったが、実際の活動の中心は、社寺の修繕ではなかった。鉄道や別荘、公園を整備して旅行者を呼び込む基盤を作り、寄付金を集める前提となる価値意識を高めようと図った。中央の華族や政治家との関わりも強く、⁽³⁷⁾新聞上では他の官製事業と並んで紹介されている。⁽³⁸⁾結果、明治二〇年代後半には寄付金も頭打ちとなったことから、保晃会は社寺を完全に修繕にするには至らなかった。⁽³⁹⁾明治二九年一月、日光町民は結集して保晃会の不正を記し、国による保護監督を願う請願を貴族院・衆議院に提出していたことが三月以降『万朝報』『東京日日新聞』で連載されている。発起人等の出世や不正収入の風聞に加え、不十分な社寺の修繕や公園の整備に対する価値観の違いによるものと報じられている。⁽⁴⁰⁾これを受けて、保晃会による活動は地域の実情に合致していなかったとの評価もみられる。⁽⁴¹⁾しかし、保晃会設立当初は、地域内で多くの支持を得ていたことは事実であり、『万朝報』『東京日日新聞』の記事以外からは保晃会をめぐる不正の実態は明らかにされていない。⁽⁴²⁾町民の意識の変遷は不確かであると考ええる。

そのため、次に地元紙『下野新聞』の記事を用いて日光町と保晃会の関係性を分析することで、社寺への意識をみていく。

第二節 日光町民の社寺への意識

まず、明治一〇年代の記事からは、日光町民が訪れた保晃会員をもてなしている様子がみられる。六月一日、二日に例年行われる日光東照宮の官祭において、明治一六年には、かねてから保晃会員をもてなすために「満願寺お祭り馬場」という棧敷を設け、懇ろに接待していることがわかる。⁽⁴³⁾この保晃会員への丁重な扱いの背景には、活動への共感度が高かったことが推測される一方で、保晃会やその幹部の財力を求めていたことも一因として考えられる。明治一八年一月二四日の記事には「日光町にて第一に尊敬せらるゝ、ハ洋人華族豪商にて金なき官員は反つて貴ハれず保晃会員ハ特別の取扱ひなり」という記述があり、⁽⁴⁴⁾経済力の面から官員の中でも保晃会員が特別の扱いを受けていることがわかる。一方で保晃会も、日光町民が特権的に収入を得る場を提供していた。明治二〇年には参詣者に対する案内人を務めた者に対して保晃会から手当を支給していたことがわかる。⁽⁴⁵⁾さらに、明治三四年に「日光案内人條規」が定められ、日光町民のみが請け負うことのできる特権の規定が設けられている。⁽⁴⁶⁾ただしこの事業は、手当が一律であったことで案内の質に問題がみられたようだ。「昔よりの定文句を其儘ならべ立るを以て過大失笑の妄評多くして甚だ聞苦しき」といった指摘も寄せられている。つまり、特に訓練を積んだ経験のない、一般的な日光町民でも案内役を務めることが可能であったと思われる。ここに日光町民と保晃会の結びつきの深さを感じられる。一方、行政面での連携も強かったと思われる。⁽⁴⁷⁾記事によると、日光町役場では平素から忙しいにも関わらず保晃会の事務の補助も行っているとの記述がみられた。

『下野(栃木)新聞』を通して、前項に見た『万朝報』『東京日日新聞』のような、保晃会に対する批判的な記事はみられなかった。明治二九年二月六日に国による社殿の保護を求める請願については大きく掲載されていたが、保晃会による請願書が中心で、町民の請願についての言及はなかった。ただし、これについては紙面の欠損や新聞社による情報選択の可能性もあるため断定は出来ないと考える。

以上から、日光町民は社寺の破壊・破損に対して強い関心と行動力を持っていたことがわかる。そのため、保晃会の方

針に賛同し、相互関係を築くことで生活上の利益も得ていたと思われる。保晃会にとっても、日光町民の多くが長年社寺に直接関わってきた人々である以上、協力を求めたい相手であり、日光の景観と産業の発展は表裏一体の関係であったと考えられる。明治二九年に『万朝報』『東京日日新聞』で連載された日光町民による批判は、保晃会の資金運用に対する一面的なものであることが予測され、設立以来の運動への支持があつてのことと考えられる。総合的に評価すると、保晃会は日光地域の発展を支える活動であつたと位置づけることができるのではないか。

社寺保存を巡って中央政府との関わりを持った日光町民だが、全国的な政治的運動においては消極的だつた。当時全国的に盛んだつた自由民権運動に対しては演説会以上の活動がみられなかつた。社寺に対する熱意はあくまで地域内部に對するものであり、それ以上の広がりを持たないものだつた。⁽⁴⁸⁾

第一章と第二章を通じて外部から評価されてきた日光と、日光町民がどのような行動論理のもと地域を成り立たせてきたのか考察してきた。近代観光地としての日光イメージは広がっていく一方で、実際の日光町民は、あくまで地域活性化のために社寺保存の活動を進めていたことがわかつた。これらの外と内の思考が重なつた時、日光はどのような変化を見せていくのだろうか。第三章では登晃者の訪れによって発展していく日光町について追っていく。

第三章 避暑地としての発展

第一節 登晃者の急増とその実態

(一) 登晃者の増加と参拝者の実態

明治一〇年代後半以降の登晃者の急増は、先行研究において既に指摘されている通りである。中でも外国人登晃者の増加は顕著であつた。背景には、外国人の避暑需要と旅行規則の改正があつた。安政五(一八五八)年日米修好通商条約を

結んだ当初、一般の外国人の移動は、居留地から一四里四方以内の日帰り旅行という制限があった。しかし、ヨーロッパ人は高温多湿な日本の夏季の気候に耐えられず、ヨーロッパに做った避暑のための夏季休暇制度を要求していた。明治七（一八七四）年に「内地旅行規則」が改正され、「外国人内地旅行允准条例」が制定されたことで形上「病氣療養」又は「學術調査」を目的とする旅行については一般外国人も内地旅行が認められるようになった。『下野（栃木）新聞』上においては、刊行当初の明治一一年から皇族、華族、政府高官、御雇外国人などの登覧情報が掲載されており、実際に明治一〇年代後半以降の外国人登覧者の増加傾向が窺える。明治二〇年代前半の多い日では一日一五人以上の著名な外国人が日光を訪れていた。明治二二年の下半期においては、代表的な旅館に宿泊した外国人に限っても、合計七四二人が訪れていたと記録されている。⁽⁴⁹⁾ 明治二三年以降になると、下野新聞紙上に登覧者の個人名は記載されなくなる。これは、登覧者が極度に増加したことに伴うものではないかと推測される。実際、明治二三年四月下旬から五月末において、一日毎の参拝人数の表が週単位で掲載されており、日々平均四〇〇から五〇〇人の一定数の参拝者がいたことがわかる。ただし、この表に掲載されているのは「日光二荒山神社、東照宮、大猷院の三箇所切符を購入して拝覽せし人員」であり、「普通の登覧人ハ此表外なり」という記述が見られる。⁽⁵⁰⁾ したがって、記録が残る参拝者は、内外国人含め実際の総人数のごく一部であり、社寺参詣以外のニーズも相当数あったと考えられる。では、そのニーズは一体何だったのだろうか。

当時の登覧者急増の背景に多くの外国人の登覧があったことから、外国人の行動を知ること、日光の様子を明らかにする意義があると思われる。そのため、次に当時の外国人による日光での過ごし方や感想を分析することで、外国人が実際に日光に何を求めていたのか検証する。

（二）外国人から見た日光

ここでは、日光を訪れた外国人の旅行記や明治一〇年代から二〇年代にかけての『下野新聞』の記事を主な分析対象と

して取りあげる。一連の分析から浮かび上がってくるのは、訪れた人の特性や時代によって、日光に対して求める価値が異文化としての日本文化と、慣れ親しんだ西洋文化に大きく二分されるということだ。

まず、日本文化として日光の価値を求めていた人がいたことが挙げられる。明治一〇年代頃には、「外国人内地旅行允准条例」に正式に則った学術研究目的の登覧がより多く記録されている。特に、日光の自然や植物の研究と、宗教や文化の研究の二つの方向性が見られた。アメリカの動物学者E・S・モースは、明治一〇年に腕足類の研究のため中禅寺湖で生物採集をしている⁽⁵²⁾。イギリスの日本研究者アーネスト・サトウは、地理や歴史、植物など多分野にわたって日本各地に興味を持っており、明治七年には『神徳集』を解説しようと試み、明治一〇年には植物採取を行っている⁽⁵³⁾。主たる目的は自分の研究にあるものの、二人とも初めて訪れた時にはまず東照宮と大猷院殿を訪れている。その後中禅寺に向けて登山し、湯元温泉に入るといふ流れは共通していた。これは、当時外国人の来日例が少なかったことによる安全確保の面から政府からの案内人や通訳がついており、同じ周遊ルートを提案した可能性が考えられる。その後アーネスト・サトウなどによる外国人向け観光案内が出版され、日光が観光地として知られるようになる⁽⁵⁴⁾と、興味に合わせて多様な地を訪れる人が増えていく。フランスの実業家であり宗教的関心が高かったエミール・ギメは、明治七年に日光の社寺を訪れると、祈禱や法要の儀式に参加したり、神職や僧侶に信仰について尋ねたりしている。ギメは西洋化しつつある当時の日本を憂いて次のように述べている。

日本人は日本の風俗に充分な自信を持っていない。彼らの力となり、幸せのもとをなしていたその習慣、制度、思想まで、彼らはあまりに早く捨ててしまおうとしている。恐らく、またそれを取り戻そうとする時が来るであろう。彼らのために私はそうなることを願っている⁽⁵⁴⁾。

ギメの発言の背景には、近代化の中で伝統文化が失われてしまったヨーロッパ社会を見てきた経験がある。それゆえ、日本人には伝統文化が持つ独自の価値に気づいて欲しいという思いがあったと思われる。このように、日光を通して日本文化に思いを馳せ、理解に努めようとした人は明治二〇年代以降においても多く見られた。シドモアは日光に至る杉並木道について、江戸時代の大名や武士の行列に代わって「実用的で無遠慮な細く見にくい電信柱が雄大な老木の枝面から前方に突き出て並んだ」ことに「なんと残念でしょう!!」と嘆いている⁽⁵⁵⁾。また、イギリス公使夫人のメアリー・フレイザーは旅行記の中で次のように述べている。

じつを言うと、今までこれを書くのがこわく、ここを訪れることさえこわかったのです。この至高の美と荘嚴の顕現とに間近にむきあう前に、何か手ほどきめいたものを受け、日本の思考にたいする判断の基準のようなものを身につけておかなければならないような気がしていたのです。そこで私は、他の寺院を巡り、他の森陰にたたずみ、他の滝、他のウグイスに耳を傾け、私の中につくられてきた西洋の感覚が、鮮やかな南イタリアの故郷の、金色に輝く廢墟や寶石をちりばめたような山々や贅沢な色彩の饗宴を忘れるようにしむけたのでした。そのようにして、精神の眼が陽光から休息し、ついに秋空の下の冷やかな木陰と鼠色の遠景と常緑の針葉樹の枝のささやきの価値を知った時初めて、私は、日光にきててもよい、今なら日光がわかるかもしれない、と思えるようになったのです⁽⁵⁶⁾。

フレイザーは、日光は日本文化を体現した地であると伝え聞き、その美の価値は「こわい」と思うほどに自分の想定を超えたものだとして事前に認識していた。ゆえに、日光を訪れる前にその覚悟と準備をするべく、自然の中に身を置いて素朴な美しさへの審美眼を身につけようとしていた。

このように日本文化を求める外国人に対して、日光町民もまた、素のままの文化を提供していた。温泉では、町民達の

恥じらいの無い姿やコミュニケーションの様子に外国人は皆衝撃を受けている。シドモアはその様子を以下のように表現した。

老若男女がまるで市場や街角で出会うように熱い湯船で気兼ねなく挨拶します。初めて目にする外国人は、この驚くべき素朴さにびっくり仰天。しかし、長く滞在している内に、大衆は子供のよう⁵⁷に天真爛漫で、妥当な新しい道徳通念を持っていることに気づきます。

この文章からは、西洋にはない「新しい道徳通念」を発見できたシドモアの喜びが感じられる。こうした日本文化との出会いを求めた外国人は、西洋文化での価値観を根底に持ちつつも異文化として日本文化を評価し、新たな価値観への視野を広げようとしていたと思われる。ただし、そのままの文化が常に快いことばかりではなかったようだ。旅館の周辺に並んだ「骨董商」の店は外国人に対する商売で実入りを上げていたことが記録されており、明治一四年に訪れたイギリス人のアーサー・H・クロウは、宿の部屋で商人達が丁寧な挨拶をしながら次々に骨董品を勧めに来ることに不快感を示している。⁵⁹ それでも、日光町民の振る舞いは概して日光に寄せられた日本文化への期待に応えられる状態であったといえよう。

このような人々がいる一方で、慣れ親しんだ西洋の文化に置き換えて日光を利用した人もみられた。特に明治二〇年代頃より社寺周辺の日光が観光産業で賑わいをみせたことで、より静閑な中宮祠を避暑地として求める人が増えたことが挙げられる。ベルギー公使夫人のエリアノーラ・メアリー・タヌタンは、明治二七年以降二、三年に一度の頻度で日光を訪れ、中宮祠周辺の別荘に滞在している。神社や瀧にも訪れているものの、「あらゆるものがとてもロマンチックで古風だったが、私が一番感動したのは、この本当に美しい環境の並外れた静けさと平和である」という記述からもわかるよう

に、ダヌタンが日光に求めたものは地理的環境であった。⁶⁰このように、日光を避暑地の一つとして楽しむ外国人が増えていた現状について、フレイザーは次のように批判している。

歴史の重みからくるこの雰囲気は日光全体を覆い、騒々しく不謹慎な観光客さえも、この穏やかな威厳に圧倒され、沈黙するのです。東京、横浜の外国人も夏にはここを訪れ、家を借ります。彼らは無意味なビクニックやティー・パーティーを行うだけで、この地に何の影響力も持ちません。まるでかの青銅の大仏のお顔にとまった蠅のようなものです。⁶¹

フレイザーにとって日光は文化や歴史の重みを体感する地であり、避暑地としての楽しみ方は、「無意味」なものにすぎなかった。しかし、全ての外国人が同じように日光を理解していたわけではない。

また、これらの西洋文化の中で楽しみを求めた外国人に向けても、日光町民は対応しようとしていたことがうかがえる。旅館や食事についてシドモアは次のように述べていた。

外人観光客のよく通るコースには、パンや新鮮な牛肉が常時用意され、昔のように食糧や必需品を持ち運ぶような旅は年々少なくなっています。人里離れた山村にも、椅子、テーブル、簡易ベッド、ナイフ、フォーク、コルク栓抜きが徐々に行き渡っています。日光や他のリゾートに見られる外人専用ホテルの料金は、通常米国にあるホテル同様、すべて込みの一日いくらという具合に固定しているので安心です。⁶²

このように西洋文化基準で日光を楽しむ人々も、一度は社寺を訪れている場合が多かった。彼らは社寺に対してどのよ

うな感想を抱いたのだろうか。シドモアの手記では、東照宮で出会った人の二通りの反応が紹介されていた。

ある日、私は家康の墓へ通じる緑苔のピロード状の階段で、素敵な装いの教養のある者に出会いました。西洋社会に暮らすこの典型的外国人は「この美と壮大さに、何もかも圧倒されました」と述べ、さらに「東照宮を創造し保持できる宗教は、何であれ偉大な宗教であり、その力を認めざるをえません。私は学生にその真価に気づくよう教えるつもりです」と感動の面持ちで語りました。

その後、ほぼ同じ階段で親しい教会の友人が私を引き止めました。彼女は両眼に涙をあふれさせ「オオー！」と深い溜め息をつき、「ここに来て悲嘆と後悔でいっぱいになりました。なんという、おぞましき異教のシンボル、祈念碑なんでしょう！この邪悪な神殿に美しきものや賞賛すべきものは、何一つ見当たりません。今や異教の信仰をいかにして根絶できるか、とても厳しい状況です。こんなところに来なければよかった！」と恨みがましく語りました。⁽⁶⁵⁾

前半の「典型的外国人」という記述から、実際社寺に対して肯定的な意見を持つ人が一定数見られたことが考えられる一方で、後半記述されていたように、宗教的価値観の面からキリスト教との違いを受容しきれない人も一定数はみられたようだ。しかし、どちらの評価においても社寺に対する偉大さや神聖な雰囲気を感じていることは共通している。その価値の認め方として異教の繁栄を是とするか、非とするかは個人によって分かれたものの、いずれにせよ、宗教的影響力を持つ日光東照宮は訪れた外国人にとって無視できない存在であった。実際、外国人は日光に対してどのような情報に接していたのだろうか。明治五年に英国系新聞「Japan Weekly mail」で連載されたアーネスト・サトウの日光への旅行記には、社寺の外観とその歴史的背景に対する記述が詳細に記されていた。⁽⁶⁴⁾外国人旅行者は、こうした旅行記によって日光を訪れる以前に宗教的存在としての認識を深めていたものと思われる。このように、日光の社寺は西洋的視点を以てしても

惹きつけられる人が多かったからこそ、明治二〇年代以降も一定の参拝客を保ち続けていたと考えられる。

明治一〇年代から二〇年代にかけて登見者の増加の多くを占めていた外国人は、日本の価値と外国的価値の双方の面から日光を求めていた。第二章でも検討したように、日光町民達が残そうとしてきた社寺の「国光」としての価値や重みは、外国人にも宗教的存在として認識されていたことがわかる。これに対してどちらの面からも満足してもらえないような名所や文化財の提供と日光町民の対応が結果的にはできていたということが、避暑地としての発展を遂げた理由であったと考えられる。では、実際に日光町民は、避暑客の増大の裏でどのような暮らしを送っていたのか、次節でより具体的に検討していく。

第二節 日光町の変化

本節では、外国人をはじめとする登見者の急増が日光町の景観や産業にどのような影響を与えていたのか、観光地としての変化とそれに伴う困難について、当時の『下野新聞』の記事を中心に考察する。まず、日光町内での産業発展の様子を見ていく。明治一〇年代後半より、登見者の中でも特に貴顕紳士達や外国人の需要に応える施設の建設が急増する。特に顕著だったのが旅館やホテルである。明治初期にも外国人を受け入れる宿舎は案内記等で紹介されていたが、その経営の多くは、東照宮や社寺関係者が幕府の衰退による減収に対して収入を補うために始めたものだった。小西旅館や金谷ホテルの起源であった金谷カテッジインなどが代表的である。ただし、これらの多くは江戸時代からの建物を利用した施設であり、元来外国人専用の造りではなかった。⁽⁶⁶⁾ それでも、明治初期において訪れた外国人の中には日本の民宿を経験できることを楽しんでる様子もみられた。当時日本文化を求めに日光を訪れていた外国人にとってはその要望を満たしていたと思われる。⁽⁶⁶⁾ その後明治二〇年代頃より、日光町外から新たに旅館業を始める人も出てくるようになる。なかでも日光ホテルは、保見会役員に加藤昇一郎や副会長の安生順四郎など保見会幹部が中心になって開業したホテルであり、保見会

の上流階級とのつながりを生かして府下や横浜で朝野紳士の賛成を集めていた⁽⁶⁸⁾。ホテル内には玉突場、馬場、日本風の家屋、温泉場が設けられていて、日本と西洋文化を融合させた娯楽が提供されている⁽⁶⁹⁾。この頃からこうした西洋文化をとり入れた外国人専用の旅館が増えていく。これは、避暑を楽しむために訪れる外国人登見者の需要に因應するものだったと考えられる。金谷カテツジインも明治六年の開業以来外国人向けに部屋や食事の内容を高めていたが、明治二六年には本格的な外国人向けホテルとして金谷ホテルを開業している。背景には、日光ホテルをはじめとする競合旅館の存在があった⁽⁷⁰⁾。なかでも日光町の小西屋は明治二三年四月から五月にかけての統計記事で取りあげられ、参拝者の変動の中でも常に百人前後の宿泊者を獲得し続ける繁盛ぶりがうかがえる。登見者個人の情報を掲載した記事においても、明治二年前後からは宿泊先の情報のみが記されるようになっていた。それほどまでに、旅館の繁盛が日光町民を含む県民の経済状況に関わる重要な情報だと認識されていたと推測される。その一方で、旅館同士が集客を争うあまり客引きが激化していたことが問題視されていたことも以下の記事からうかがえる。

如何に百般競争の世の中とハ云へ斯る有様ハ寧ろ弊風として其筋にて嚴重の取締を加へられたきものなり。聞くが如くんば日光停車場前には午前六時三十分頃より午後五時三十分頃迄の間車夫并に宿引体のもの雲の如とく群がり居り汽車の到着すると我先に進み寄り「旦那湯宿までお伴は如何、何屋何兵衛は手前でござる」と執拗くも旅客の袖に縫り附くには何人も皆閉口せざるはなしといふ⁽⁷¹⁾。

また、登見者の急増に拍車をかけていたと思われるのが鉄道の敷設である。日本鉄道会社によって明治一九年六月に上野・宇都宮間が全通することを受け、上都賀郡有志は宇都宮から分かれて日光まで鉄道を建設する計画を立てた。しかし、明治二二年一二月二四日に今市町人民は日光町までの鉄道延長中止の請願を出している。両町間で認識の齟齬があ

り、今市町を超えて日光町までの鉄道計画であることが認識されていなかったことが原因とみられる。今市町民の「獨り同町（日光町―筆者注）にのみ利益を専有され今市町の商業を衰微せしめ市民一般の困難を醸すに至るべし」という懸念が推察されている。⁽⁷²⁾ここからも、東京から日光町への観光客の増大による相当な利益が見込まれていたことがわかる。実際この日光鉄道によって、東京と日光は五時間で結ばれるようになった。明治二三年五月には上方からの登見者が増加していることが記録されており、西日本など離れた地域からの登見を促進させたと考えられる。しかし、東日本や近郊においては日帰り客を増やす結果となり、宿泊客の大幅な増加には繋がっていないことも指摘されている。⁽⁷³⁾

登見者増加に伴う旅館や鉄道の建設ブームは、相場の上昇も引き起こした。明治二一年七月には地価⁽⁷⁴⁾、二三年四月には米価⁽⁷⁵⁾の非常な騰貴が記録されている。特に土地においては東京の貴顕紳士等による買い占めが報告されており、深い山奥にまで及んでいることがわかっている。値上げの影響は町民の生活にも及んだものと考えられる。明治二二年一〇月には泥棒が流行し⁽⁷⁶⁾、明治二三年末には夜半追剥ぎが出現するという風聞が出ている⁽⁷⁷⁾。しかしこの他にも、明治一〇年代後半以降、登見者を獲得している中でも不景気な町の様子を報じる新聞記事が頻繁に見られる。登見者と日光町の経済にはどのような関係性があったのか。ここに一大観光地となった日光町の特徴が表れているのではないかと推測される。

ゆえにここでは、日光町における景気悪化の理由を登見者との関係から大きく三つに分けて考察する。第一に、明治二〇年代の登見者の多くが別荘や借家を持つようになったためである。明治二二年八月一〇日の『下野新聞』「日光入湯本たより」によると、当時登見者の「三分の二は俗に小屋持と称する自炊連にして其他万事旅店の手に係り居るものハ僅に其の三分の一に過ぎず」とあり、料理屋や旅館を利用しない人が増えていたことが挙げられる。日光に於ける食事内容も影響していると考えられる。実際、日光は寒冷な気候や地質の都合から食糧が手に入りにくい地であり、別荘地の多い中宮祠は日光町よりもさらに高度が高いため、尚のことであった。地域住民さえも日光町から食糧を運んでいたが、これらの食事が外国人の口に合わなかったことが考えられる。シドモアの旅行記に見られたように外国人向けの食材を用意して

いる旅館も見られたが、全てではなかったと思われる。次の記事から読み取れるように、日光ではなく周辺都市から滋養のある食材を求めることも多かったと見られる。これによって日光町は利益を得る機会を失いつつあったと言える。

〔□は判読不能〕滞在の諸外人ハ米、麦、椎茸豆腐等の如き無味淡泊なる食物にてハ長く堪ゆへくもあらず、銘々毎日宇都宮鹿沼等の地へ脚夫を以て鶏□鴨鶏卵其他滋養物を購入せしむるよし。⁽⁷⁸⁾

第二に、政治の動向によって政府高官の登見が変動するためである。明治一九年八月六日『下野新聞』では、「本年高等官員ハ一人も来らず。或ハいふ廿三年の近きにあるが為め幾分各自に用意すると。客冬改革の際非免となりし人へ遠慮もある為なるへし」との記述がある。明治二三年の衆議院議員選挙への準備や明治一八年の第一次伊藤内閣で罷免された官員への遠慮から、表だって旅行する官員がいなくなったと解釈できる。経済力のある官員が頼みである日光町にとって、政治的動向は景気を左右する要因であったと思われる。また、その様子を見た一般の人々も「上を見習ふ人情として人々孰れも湯治の企てなく去年の湯治は身の保養の為にあらず。時の風潮の為めなりけり。今年ハ世間の聞えを憚らずして入浴に赴くの愚を為す可からずと都門を去るもの寡かる可き風潮」⁽⁷⁹⁾があると記述がみられる。湯治をはじめ日光への避暑は娯楽の一つであり、周囲への風聞を理由に登見を控える動きは政府高官から一般庶民にまで広がっていくことが予測される。

第三に、気候の変動である。元來、日光の冬は非常に寒く雪が多い地域であるために、避暑客のピークは夏秋が中心であった。そのため、温暖な気候が長く続く年には来見者も増加する一方、⁽⁸⁰⁾早期に気温が下がる年は避暑客も減ってしまった。景気が天候に左右されることは、観光地において共通の特性であるともいえる。しかし、繁忙期の短さを考えると、観光産業としてのリスクの高さは特徴的であると言えよう。

日光町は明治一〇年代以降、登見者の増加に伴い産業が活性化した一方で、同業者の競合や地価米価の上昇を引き起こしていた。また、別荘地が発展することで日光町への利益が入りにくくなるほか、天候や政府高官に依存した産業の特色によって複数のリスクを抱えていた。そのため、登見者と日光町の景気に相関関係がある訳ではなく、登見者が増加しても、常に安定した暮らしが出来ていた訳でもなかった。また、これは全国的に観光地で同様に見られる現象でもある。これはすなわち、日光が観光地としての成長を遂げていたことへの証左でもあるといえる。

第三節 日光町民の対外意識の変化

本節では、第二節で明らかになった日光町の暮らしの変化の中で住民達の対外意識がどのように変化したのか考察する。内地旅行者が増えたことで全国的に外国人への視線は変化したことが推察される。その中でも避暑地として大勢の外国人と関係性を持っていた日光町民には、独特の意識が見られたと考えられる。そこで、下野新聞から見られる日光町民の行動を通してみえる日光町民の対外意識について時代の変化と共に考察していく。

まず、明治一〇年代以前においては、兵力や文化の面から外国人に対する劣等感を持ち、畏れや恥の意識が全国的に見られた。明治七年ドイツ公使と対話する大木勝参議は、「中々人民ノ愚昧開明ノ域ニ到ラズ」「実ニ御耻カシキ次第⁽⁸⁷⁾と述べている。明治一一年六月三〇日下野新聞の寄書においては、政府の起業公債の募集に応じる人が少ないことについて「第一外国人ニ対シテ耻入ル事ニテ実ニ吾々人民ハ彌益赤髭(ニ)見下サル、譯ニテ如何ニモ残念至極ノ事⁽⁸⁸⁾」との記述がある。(御雇)外国人を「赤髭(先生)」と呼び、距離を置いている様子はこの時期よく見られた。日光については、明治一三年二月一日の投書で以下のように皮肉めいた記述がみられた。

日本若シ外国ニ蹂躪セラレ、彼ノ天竺ノ錫倫島ノ英人ノ爲メニ掠奪セラレ、靈鷲山ナル六ノ黄金佛ノ蒸気船ニ載セ去

ラルル如く、日光ノ堂塔伽藍モ双輪塔モ英ノ龍倫佛ノ巴里斯ニ設置セラルル如キ事アレバ、其レコソ日光ハ外国迄モ鳴リ響キタル名山所丈ケ其評判モ一層世界ニ高カル可シト思ハル。⁽⁸⁴⁾

日光の文化財が海外の所有になることへの恐れを示すことで、海外との関係性の不安を意識させる目的があったと思われる。当時自由民権運動の高まりもあつて日本の団結を求める表現は新聞上に多くみられたが、その理由として外国への恐れが掲げられていたのは、当時の対外意識の特色を表しているといえよう。

明治二〇年代以降になると、このような外国人に対する恐れへの態度はみられなくなる。この頃から避暑等を目的として全国各地を訪れる外国人も増えるため、観光地にとっては外国人からの注目が経済やアイデンティティに関わる要素であつた。日光においても、日本を代表する地としての存在を発信する動きが高まつた。明治二三年四月一五日から五月二〇日まで開催された日光美術展覧会では、その目的を「同地（日光——筆者注）ハ外国人の来往あるが故一は以て彼をして我邦古有の美術優逸なるを知らしめ一は自己の名譽を博するを得るの好時期」と説明している。⁽⁸⁵⁾最終日には日光町民の入場も許可され、中々の賑わいであつたことが報告されていることから町民の関心も高かつたことが分かる。さらに、明治三五年の洪水と台風による甚大な被害を受けたことから、明治四四年以降大正一一年まで計七回国庫の補助を仰ぎ、日光山を帝國公園とすることへの請願が町長を代表とする日光町民から提出されている。⁽⁸⁶⁾これらの請願では共通して、日光山が「東洋ノ公園ト称セラルル名地」であり、その本質が失われることは「同地ノ不幸タルノミナス又帝國ノ面目ニ関スルコト多大」と述べている。⁽⁸⁷⁾これは保晃会が設立時から会員に向けて呼びかけていた表現とほぼ同じである（第二章第一節参照）。当時の発信事業の中には保晃会が発起、主導しているものが非常に多いが、この請願の例から日光町民もまた、日光は海外に対して発信するべき、日本を代表する土地であるという意識を持つていたことがわかる。

こうした対外意識の変化の一方で、日光の西洋化に批判的な意見も外部より多く寄せられるようになる。ここでは県内

の新聞である『下野新聞』も日光町の外の存在と捉え、記事を分析する。まず、明治一五年一二月一四、一五日鈴木屋等で開かれた「骨董物を外国人にはめ込み否売却したる利益の意外に多かりしを祝」す西洋祭について記事が掲載された。日本と西洋の祭が融合した様相に日光町民は、「一方ならぬ趣向に市中の人々ハ男女老少の差別なく如何なる祭典のあることやらんと日の暮るや否や吾れ後れしと各自先を争ふて回家へ集ひ来るその混雑云うべからず」と、多くの人が関心を寄せた。これに対して新聞上では、「日光ハ堂宇の美麗と山水の勝景とを以て有名の土地なるが其の政治思想に乏しくて物數奇な事をするにも亦随分有名なりと云ふて可ならんか」という評価を得ている⁽⁸⁸⁾。続いて、明治二三年九月二九日には寺院の賃貸において以下のような批判が掲載された。

當山内の坊様連は、銘々が佛敵として賤しむべき外国宣教師へ其の寺院を貸し渡し、賃料を以て生計及び〇〇(マ)買入れの資本となすは佛法の末世歎かはしき事共なり。

寺の僧侶達が異教の相手に対して収入を得ていることへの違和感に触れている。実際幕末の衰退期においても、外国人の宿泊受け入れをすることで糊口をしのいでいた寺院は多数挙げられている。明治二〇年代には避暑をするために長期間滞在できる場所を求めた外国人が増えており、その需要に応える形で収入を得ていた。宗教的規範は保っている状態で商業上の関係も両立させていたことで、時代の変化に柔軟に対応していたことが分かる。

一方で、この記事は日光の内地雑居が進んでいる現状も表している。明治二〇年には日本人の名義を使った事実上の内地雑居が全国的に問題視され⁽⁸⁹⁾、明治二六年八月一七日付の調査によると、大字日光字中宮祠、大字日光山内寺院、大字日光字西川において二三年一三五八人、二四年一七四一人、二五年一九二八人であった⁽⁹⁰⁾。記者は宗教の道に外れた行為であることを指摘しているが、宣教師が賃貸をしていること自体に言及していない。これは、明治二三年当時から既にこの光

景が日常的になっていたことを示していると見えよう。明治二六年九月一三日には新聞『日本』に「巴戟天人」という筆名で「日光に遊びて」という日光の現状を批判する記事が紹介されており、内地雑居が進んだことで日光に「似つかわしくない」西洋文化が流入していることが批判されている。著者が日光に対して伝統的な日本文化や宗教的な神聖さを求めていることがわかる。当時内地雑居論には賛否両論あったが、日光町の内部において大きく問題視されている様子はみられなかった。実際、日光町民は内地雑居論が全国的に過熱している中でも、外国人への賃貸や別荘地の取引を変わらず行い続けていた。明治初期以降、外国人との関係性によって産業を成立させてきた日光町にとって、内地雑居は今更緊張感を持つものではなかったと考えられる。

明治期を通して外国人に対する意識は全国的に変化した。日本の文化や産業発展の脅威であるとする見方は根底にあり続け、内地雑居論において再燃する。その一方で、日光町は、幕府の庇護がなくなつて以降、生計を立てるために外国人を登見客として迎える見方が比較的早くから定着していたと考えられる。そのためには手段がなかったという見方もできるが、西洋文化をはじめとする新しい文化を受け入れる器の広さや柔軟性があると捉えることも可能である。日本を表する地として自ら誇り、社寺の保護に精力的な日光町において西洋文化は一見異質な存在に思える。だがそれらを両立させて外国人を受け入れ続けてきた背景には、日光町独自の対外意識があったと考える。

明治期の登見者の多くを占めた外国人の中には、日本文化を求めると西洋文化視点を求める人のそれぞれの需要があった。日光町は双方に応じた対応をする中で産業形態を変え、その結果、町民も異文化に対する対立意識が薄らぎ、困難にも適応できる素地が築かれたと思われる。このような町民の多文化主義の形成が観光地としての発展に繋がったのだろう。

おわりに

本稿では、観光イメージの創出による日光町の「外」からの視点と、日光町民の行動論理に見る「内」の視点から、避暑地における内外の交渉関係を捉えることで、明治期における日光の特性と発展への経緯を追ってきた。

第一章では、「外」の視点から日光イメージの創出の背景を考察した。日光のイメージは、社寺に加え天然と人工の美を併せ持つ場所へと拡大し、徳川家への印象も良化した。第二章では、「内」の視点から町民による日光への意識を明らかにした。町民は社寺保全に強い関心があり、地域に対する行動力を持っていた。第三章では、登見者による「外」からの視点と、それに応える日光町の「内」の行動を通して、避暑地としての町の景観や町民意識がどのように変化したのか分析した。日光を訪れた外国人は日本文化と西洋文化視点の二つのニーズを持つ人がいたが、町民達はそれぞれに応じて柔軟に対応し、産業形態を変化させていた。

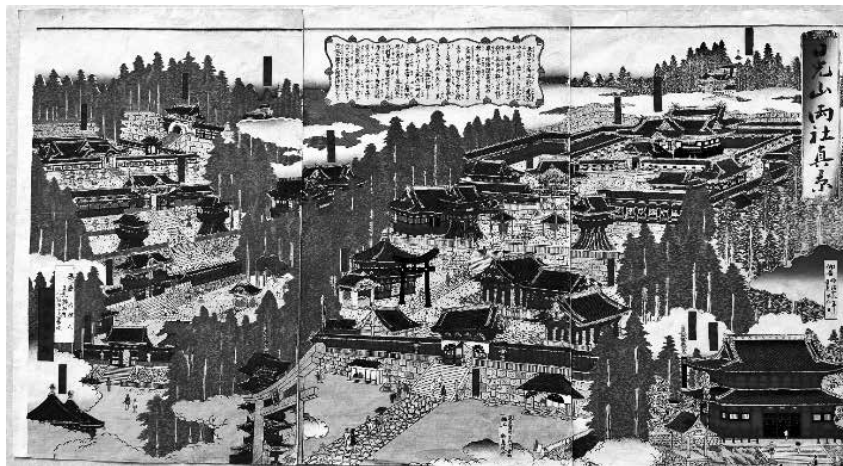
以上の成果から分かる日光町の「外」と「内」の関係性は以下のとおりである。まず、「外」からの登見者の状況として、明治期には、西洋化が大きく進みつつも従来の日本文化へのニーズが混在していた。一方、これらの登見者を迎え入れた日光町「内」部は、徳川家への報恩精神を変わらず持ち続け、町内部の問題に対する関心と行動力も持ち合わせていた。この特性があったからこそ、町民達は社寺の保存と並行して観光業における西洋文化の新たな需要にも対応することができた。一見、これらの行動には矛盾があるように思われる。しかし、地域資源の全ての魅力を生かしたことで幅広い登見者を受け入れ、町の経済を発展させることに成功したのだ。これによって、日本人で日光に対して近世来の社寺参詣や湯治などのイメージを持っていた人も、そのイメージを周辺の自然名所や市街地へと拡大させていくことになる。そしてそれは同時に、日光という言葉が指し示す地理的な範囲も拡大していったと考えられる。こうして、「外」からの登見者は自分達のニーズに応じてもらうことで日光町「内」部に支えられる一方で、日光町「内」もまた、登見者による消費

行動によって経済面から「外」の登見者に支えられているという循環構造を完成させた。

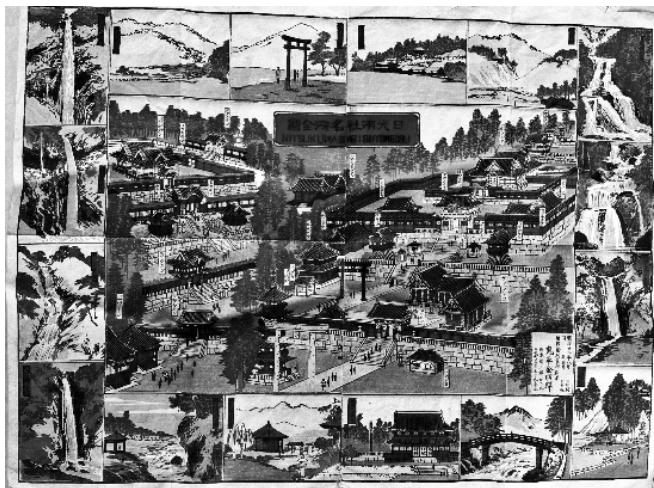
日光は元来、観光地として様々な要素を併せ持っている。しかし、それらの要素もまた、「外」からの期待やイメージの力に対して、「内」部が柔軟な対応力を発揮してこそ完成したものだ。明治期日光の発展には、多面的な観光資源を活用することのできる内外の関係性が欠かせないものだったといえよう。

これまで明治期の観光地形成の背景には、地理的特徴や交通手段等が挙げられてきたが、今回の日光の発展の背景から、地域資源による複合性とそれに対する期待やニーズが結びついていることが明らかになった。大正期以降も、日光は多数の外国人を含む観光客を受け入れ、日本を代表する観光地として揺るぎない地位を築いていく。その背景にも、国立公園としての自然保護やリゾート開発⁹⁴など、複合的な地域資源の活用があったと考えられるが、詳細については後稿を期したい。観光地「日光」は、変わりゆく日本において時代の逆風を乗り越えて成立した。それは単に観光ブームの影響によるだけでなく、住民達が地域のアイデンティティを問い、地域資源の活用に積極的に取り組むことで築き上げられた歴史の所産である。それ故「日光」は今なお人々を惹きつけてやまないのである。

【絵図1】『日光山両社真景』（著者蔵、明治一八年）



【絵図2】『日光両社名所全図』（著者蔵、明治二二年）



注

- (1) 日光町民の人口構成は、明治三(一八七〇)年一二月の日光県からの届出によると、全人口のうち九五%以上を平民が占め、平民の次に多い三六五三人が東照宮をはじめとする社寺に關係する職業につく身分であった。(『日光県史 政治部 戸籍』国立公文書館所蔵、明治二年―四年(国立公文書館デジタルアーカイブ)) 元来、日光の土地は土が痩せていて農業には向きづらい土地であった。明治一八年内務省による地誌編輯材料取調書の「民業」の項目からは、手工業や社寺案内が中心で、農業従事者がほとんど見られなかったことが分かる。実際、明治二〇年代後半以降になると電力事業や製造業も盛んになるものの、これらの発展の背景には鉄道敷設を契機に人や材料の輸送手段が整備されたことがある。そしてその鉄道敷設が進んだ背景には、観光業による発展があった(詳細は第三章で後述)。
- (2) 老川慶喜『鉄道と観光の近現代史』(河出書房新社、二〇一七年)。
- (3) 小林収『避暑地軽井沢』(樺出版、一九九九年)。
- (4) 関戸明子『草津温泉の社会史』(青弓社、二〇一八年)。
- (5) 谷口裕信「神苑会の活動と明治の宇治山田」(ジョン・ブリン『変容する聖地伊勢』、二〇一六年)。
- (6) 福田和美「避暑地『日光』成立史(Ⅰ)―近代日光の繁栄と『内地旅行規則』及び『日本旅行案内』―」(『大日光』第六五号、一九九四年)三八頁。

- (7) 福田和美「避暑地『日光』成立史(Ⅲ) 近代日光の繁栄と『内地旅行規則』及び『日本旅行案内』―」(『大日光』第六七号、一九九六年)七一頁。
- (8) 田代江太朗 伊藤弘「観光における二社一寺と東町の關係」(『ランドスケープ研究』八三巻五号、二〇二〇年)六九七頁―七〇二頁。
- (9) 佐藤権司『日光領の農民世界―生活と文化を育てた人々―』(随想舎、二〇〇一年)。
- (10) 木村遼之「明治二十年前後における古社寺保存運動―日光・保見会の活動を事例として―」(『史境』第七〇号、二〇一五年)。
- (11) 『日光市史』(日光市史編さん委員会、一九八六年)三九―四四頁。
- (12) メアリー・フレイザー『英国公使夫人の見た明治日本』(淡交社、一九八八年)二二九頁。
- (13) 榎井由紀「温泉の効能から見た伊香保温泉の近代化」(『観光学評論』、二〇一四年)。
- (14) 塚田金三『日光山中禅寺温泉記』(明治三六年)。寛政三年のものについては作者不詳。
- (15) 明治一九年二月刊行内務省衛生局編集『日本鑛泉誌』に基づく分析表。
- (16) 明治検定制度が始まるまでに使用された明治初期の教科書。
- (17) 教科書検定制度・民間で著作された教科書を文部科学

大臣が調査し、教科用として適切であると認められたものだけに使用を許す制度。明治一九年（一八八六）小学校令に基づいて採用。明治三六年（一九〇三）から小学校教科書は国定制度となったが、第二次世界大戦後新学制の発足とともに、小・中・高等学校の教科書の認定のために再び採用。正式名は教科用図書検定制。〈日本国語大辞典〉。

(18) 小内左文二『新編国語読本』高等女児教員用巻の四（普及舎、一九〇二年）二二頁 国立教育政策研究所教育図書館 近代教科書デジタルアーカイブ (<https://niropac.nier.go.jp/lib/database/KINDAI/EG00016221/>)。

(19) 前掲(11)、一三二頁。

(20) 篠原虎三郎『下野国日光山湯本温泉繁盛記』（明治一四年）七頁参照。

(21) 股野潜『日光山探勝略記』（明治一五年）一一～二〇頁参照。

(22) 『下野新聞』明治一七年三月一五日付。

(23) 『栃木新聞』明治一四年八月一日付。

(24) 小幡篤次郎『小学歴史階梯』（明治二四年）二七頁～二八頁、国立教育政策研究所教育図書館 近代教科書デジタルアーカイブ (<https://niropac.nier.go.jp/lib/database/KINDAI/EG00001243/>)。

(25) 前掲注(24)、一三三頁。

(26) 大槻如電編『東京開市三百年祭記事』（国立国会図書館デジタルコレクション、明治二三年）一〇頁。

(27) 神仏分離令の当初の目的は仏教の影響以前の神道を再現することにあり、僧侶の神勳を禁じ、神社から仏教色を払拭しようとしたものだった。日光においては輪王寺をはじめ山内の僧侶に神社への奉仕が禁止された。旧社家は二荒山神社と東照宮に奉仕させた。また、東照宮境内の薬師堂、輪蔵（一切経蔵）、鼓楼、鐘楼、五重塔と、二荒山神社境内の三仏堂、相輪櫓、中禅寺立木観音堂などの仏堂を輪王寺で引き取るように命じられた。このほか本宮神社、滝尾神社、寂光権現にも仏教施設が多数あり、同様の通達が見られる（前掲注(11)、三四、九三頁）。

(28) 前掲注(11)、三五頁～三九頁、九三頁～一〇九頁。

(29) 国立公文書館所蔵「日光山三仏堂之儀ニ付内務卿上申」（国立公文書館所蔵「巡幸録・東巡雑録」上巻・明治九年、第一〇四号文書（国立公文書館デジタルアーカイブ）。

(30) 国立公文書館所蔵「日光山へ賜金之儀」（国立公文書館所蔵「巡幸録・東巡雑録」下巻・明治九年、第七号文書（国立公文書館デジタルアーカイブ）。

(31) 安生順四郎・明治・大正時代の公共事業家。弘化四年九月三〇日生まれ。明治九年栃木県最初の本格的牧場を上粕尾村（栗野町）に開設。一二年栃木県会議員、初代議長。保民会の設立にくわわり、日光の社寺の保護・修繕をすすめる。那須開墾社発起人をつとめた。昭和三年五月一日死去。八二歳。下野（栃木県）出身（日本人名大辞

典)。

- (32) 「保晃会沿革書」前掲注(11)、六一九頁～六三〇頁。
(33) 「日光山神社仏閣保存之儀ニ付願」前掲注(11)、一〇四頁。
(34) 『栃木新聞』明治一三年五月一九日・二一日付「保晃会録事」。
(35) 前掲注(10)、一一七頁。
(36) この公園は明治二六年に造成された浩養園で、保晃会の功績を讃える保晃会碑の建設に伴い造成された。日光の天然の美の中に人工的な庭園や美術館を建設したことに對する非難の声が上がっていた(『万朝報』明治二九年三月二八日付「日光山中の秘(十四)」)。
(37) 浅草本願寺中に出張所を設け、「朝野の紳士豪商」など上流階級百三十余名による「賛成会」が開かれている(前掲注(11)、一一五頁)。
(38) 『栃木新聞』明治一三年八月四日、二〇日付の論説、投書それぞれにおいて「警察署郡役所ノ建築」「道路修繕」「虎列刺患者ノ協救」と並ぶ県内の「美拳」と説明されている。
(39) 明治一六年からは、社寺の破損が著しい部分において社寺収入金と保晃会募金を折半して修繕が行われたものの、小規模にとどまっていた。明治二七年には、東照宮唐門屋根が大きく朽腐し、多くの箇所で漆膠が剝離しているなど修繕期を既に過ぎていることが問題視された。調査の

結果、修繕には八〇万円以上必要になったが、保晃会の集金額(明治二九年三月二日時点で二万二五三円(「保晃会沿革書」前掲注(17)、六一九頁))では及ばなかった(「日光山建立及修繕沿革」、前掲注(11)、六三三頁)。

- (40) 『万朝報』明治二九年三月一五日付～四月三日付「日光山中の秘(一四～二〇)」。
(41) 前掲注(10)、一一九頁。
(42) 新聞記事の内容と町民の請願書に對して、保晃会は不正の事実を否定し弁明を記している。明治二九年三月には保晃会からも国による保護を願う請願書を提出している。
(43) 『栃木新聞』明治一六年六月九日付「保晃会(承前)」。
(44) 『下野新聞』明治一八年一月二四日付「日光彙報」。
(45) 『下野新聞』明治二〇年六月二一日付「登晃餘聞(承前)」。
(46) 『下野新聞』明治三四年五月一九日付「日光案内人條規」。
(47) 『下野新聞』明治一八年一月二六日付「日光彙報のつづき」。
(48) 栃木県は他県に比べ相対的に国会開設運動に消極的で、請願数も少なかったが、中でも日光町は政治思想に乏しいとの評価が栃木新聞の記事に見られる(『栃木新聞』明治一六年一月四日付)。町民は、県内でも代表的な政治結社の都賀演説会に参加していたが、知識交換以外に活動はなく(『栃木新聞』明治一五年二月二日付)、政府への請

願を行った社寺運動とは関心の格差がみられる。

- (49) ここで対象となった旅館は、日光ホテル、金谷善一郎、鈴木傳平、小川トク、福田重吉、船越言平、我妻和重、照尊院、南照院、唯心院、光樹院、安養院、大門喜一郎、神山徳平、鈴木喜太郎、野辺金太郎、南間久吉、渡邊松五郎、観音寺、金蔵坊(『下野新聞』明治二三年一月五日付)。

- (50) 『下野新聞』明治二三年四月二八日付。

- (51) 内国人においては経済的困窮によって参拝に到達できなかった存在も一定数いた。明治二年一月一九日の『下野新聞』には、遠方より参拝に來ても二社一寺の拝観料を支払うことができずに帰る人々が多数いることが記されている。

- (52) 前掲注(11)、一四九頁。

- (53) アーネスト・サトウ 庄田元男訳『日本旅行日記』二(『新人物往來社、一九九一年)。

- (54) エミール・ギメ著 岡村嘉子訳・尾本圭子解説『明治日本散策 東京・日光』(角川文庫、二〇一九年)。

- (55) エリザ・R・シドモア 外崎克久訳『シドモア日本紀行―明治の人力車ツアー』(講談社、二〇〇二年) 一八三頁。

- (56) 前掲注(12)、二二九頁。

- (57) 前掲注(55)、二一五頁。

- (58) A・B・ミッドフォード『英国貴族の見た明治日本』

(『新人物往來社、一九八六年) 一八七頁。

- (59) 前掲注(11)、一六九頁。

- (60) エリアノーラ・メアリー・タヌタン 長岡祥三訳『ペルギー公使夫人の明治日記』(中央公論社、一九九二年)。

- (61) 前掲注(12)、二二九頁。

- (62) 前掲注(55)、一八九頁。

- (63) 前掲注(55)、二〇〇頁。

- (64) アーネスト・サトウ『TRAVEL IN THE INTERIOR YEDO TO NIKKO AND BACK』(『Japan Weekly mail』一八七二年四月六日〜一三日)。

- (65) 申橋弘之『金谷カテツジイン物語―日光金谷ホテル誕生秘話』(文藝春秋企画出版部、二〇一七年) 七三頁。

- (66) 明治二五年京都を訪れたオトフリート・ニッポルトは自らを「世界漫遊者」ではないと述べ、外国人向けの飲食店や接待に対して不満をつづっている(オトフリート・ニッポルト『西歐化されない日本』(えにし書房、二〇一五年)。

- (67) 前掲注(65)、一〇四頁。

- (68) 『下野新聞』明治二年五月二九日付。

- (69) 『下野新聞』明治二年一〇月四日付「日光ホテル開館式」。

- (70) 前掲注(65)、一五九頁。

- (71) 『下野新聞』明治二三年九月三〇日付「日光停車場の近況」。

- (72) 『下野新聞』 明治二二年二月二四日付。
 (32) 『いまいち市史』 通史編V (いまいち市史編さん委員会、二〇〇五年) 三四八頁。
 (74) 『下野新聞』 明治二二年七月一六日付。
 (75) 『下野新聞』 明治二三年四月二五日付。
 (76) 『下野新聞』 明治二二年一〇月五日付。
 (77) 『下野新聞』 明治二四年一月六日付。
 (78) 『下野新聞』 明治一八年八月一〇日付。
 (79) 『下野新聞』 明治二二年七月二〇日付。
 (80) 『下野新聞』 明治三四年四月一四日付。
 (81) 『下野新聞』 明治三六年九月一三日付。
 (82) 六月二〇日「英國公使提出ノ外國人内地旅行規則案討議ノ件」(『日本外交文書』「外國人内地旅行ニ関スル件」、六一〇頁、明治七年)。
 (83) 『下野新聞』 明治一一年六月三〇日付「寄書」。
 (84) 『下野新聞』 明治一三年二月一日付「下野人士ノ謬ヲ歎ス」。
 (85) 『下野新聞』 明治二三年三月一日付。
 (86) 永嶋正信「国庫ノ補助ヲ仰キ日光山ヲ公園ト為スノ請願」と保見会について(承前)。「国立公園 = National parks」三四四号、一九七八年)。
 (87) 「国庫ノ補助ヲ仰キ日光山ヲ公園ト為スノ件」(国立公文書館所蔵「議員回付請願書類原議」(四)、明治四二(四年、第三五〇号文書、国立公文書館デジタルアーカイブ)。

- ブ)。
 (88) 『下野新聞』 明治一六年一月四日付。
 (89) 特に明治二〇年代には条約改正論争と相まって外国人に対する攘夷的な考え方も広がり、新聞や政府内においても賛否両論の大論争が起きた。(稲生典太郎『内地雑居論史料集成1』(原書房、一九九二年) 五頁〜七頁。
 (90) 前掲注(89)、二六頁。
 (91) 『日本』 明治二六年九月一三日付、巴戦天人「日光に遊びて」。
 (92) 『ジャパンツーリストビュロー』 事業報告 大正5年度(国立公文書館デジタルアーカイブ) 三二頁〜三三頁。
 (93) 日光国立公園は、昭和六年に国立公園法の制定によって、昭和九年一二月四日に国立公園に指定された。(前掲注(86)、九頁)。
 (94) 昭和七年には東武鉄道によるスキー場開設が要請されるなど、冬季スポーツを楽しめる観光地が形成されていく(前掲注(2)、一四六頁)。
 (栃木県庁観光交流課)